

2025年度(令和7年度)学校評価自己評価表

精華中学校区	校番 35	福山市立藤江小学校
最終更新日	2026年(令和8年)3月10日	

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <ul style="list-style-type: none"> プロセス評価の評点が向上するように、PDCA サイクルの視点をもってマネジメントしてほしい。 学校と地域との連携協力をさらに深め広げていくことが大切である。 少人数の良さを生かし、一人一人の子どもたちに成功体験を持てる機会を通して自己肯定感を育ててほしい。 	<p>児童生徒の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> 興味をもったことを探究するなど、主体的に行動する姿が増えている。 自分の考えを持ち、他者に伝えるなど、自己表現力が育ってきている。 教科で身につけたい力が十分身につけていない児童生徒がいる。 人間関係の固定化やレジリエンスにややかけるところもある。 	<p>育成する資質・能力</p> <p>めざす子ども像(義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>【主体的に学ぶ力】【思考力・判断力・表現力】【自己形成力】</p> <ul style="list-style-type: none"> 確かな学力を身につけ、自ら進路を切り拓く子ども 自己肯定感が高く、地域に愛着と誇りを持ち、社会に貢献できる子ども 学力分析と授業研究を通じた「主体的な学び」の授業づくりに取組み、学力の向上を図る。(授業研究部会) 「自分で選び・決める」活動に取組み、思考力・判断力・表現力を育成する。(プロジェクト部会) 児童生徒の自己肯定感と自己有用感を向上させ、自己形成力を育成する。(自治活動部会)
---	--	--	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>○笑顔で挨拶ができる子ども ○地域に誇りをもつ子ども</p> <p>○自分の将来の夢に向かい粘り強く取り組める子ども</p>	<p>学校教育目標</p> <p>自分を大切に 人を大切に ふるさとを大切に しなやかに、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもの育成</p> <p>「チャレンジ! 藤江っ子」</p> <p>～未来に向かって アップデート～</p>	<p>育成する資質・能力</p> <p>めざす子ども像</p> <p>小1～小4</p> <p>小5～中1</p> <p>中2～中3</p>	<p>主体的に学ぶ力</p> <p>日常生活をよくするために、生活体験などの情報を生かし、様々な課題に意欲的に取り組むことができる。</p> <p>日常生活や地域社会をよりよくするために、学ぶことに対し自分で価値を見出し、様々な課題に意欲的に取り組むことができる。</p> <p>社会をよりよくするために、学ぶことに対し自分で価値を見出し、様々な課題に自発的・能動的に取り組むことができる。</p>	<p>思考力・判断力・表現力</p> <p>自分の考えを持ち、相手意識を持って、話したり書いたりして表現している。</p> <p>日常生活や地域社会をよりよくするために、既習事項を活用して、自分の考えや意見を話す・書く等で表現している。</p> <p>社会をよりよくするための課題を見つけ、既習事項を活用して、自分の考えや意見を工夫しながら表現している。</p>	<p>自己形成力</p> <p>思いやりの心を持ち、目標を達成するために、協力し合い、粘り強く努力している。</p> <p>日常生活や地域社会をよりよくするため、相手の立場も思いやりながら目標を決めて、最後までやり遂げようとする。</p> <p>誰に対しても思いやりの心を持ち、より高い目標を達成するために、相手の立場や考えを尊重しながら、粘り強く取り組み、やり抜いている。</p>
<p>現状</p> <p><児童生徒></p> <p>主体的な児童会・委員会活動を通して、児童に自分たちで学校をよりよくしようとする気持ちが高まってきた。関わり合いが増え、感謝の気持ちが育ってきた。相手意識をもって伝えることは出来てきたが、相手が何を伝えようとしているのか受け止め、理解するまでには至っていない。</p> <p><授業></p> <p>児童自らが学びに向かい、情報を整理する方法は身につけてきた。しかし、目的や意図に応じて、それらの方法を使って自己解決することは十分ではない。</p>	<p>研究</p> <p>テーマ</p> <p>内容的</p> <p>主体的に学び続ける子どもの育成～自己の学びを自覚し力をつける授業づくり～</p> <p>○児童に学びの必然性をもたせることによる学習意欲の向上</p> <p>○児童一人一人の学びの見取りによる授業・単元づくり</p> <p>○学校と家庭を学びで繋ぐ振り返りの活用</p>	<p>めざす授業の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> 単元のゴールを児童と教師が共有し、見通しをもって学びを進めている。 児童が自ら課題を見つけ、見方・考え方を働かせ自らの思考を表現している。 振り返りを通して、児童自らが学びの変容を自覚し、次の学びにつなげている。 			

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る取組状況	70%以上	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況	70%以上	達成評価	総合評価	改善方策
4	「主体的な学び」の授業づくりを進め、学ぶ意欲と学力の向上を図る。	★	見直し	個々のつまずきを把握し改善を図るとともに、主体的・協働的な学びを大切にした授業づくりで、学力の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 単元のゴールを児童と教師が共有し、学力向上につながる授業を行う。 児童のつまずきを解消するため「授業づくりポートフォリオ」を作成し、学力分析・課題改善を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 算数科の単元テストにおいて、60点未満の児童を20%以下にする。 標準学力テストの算数科において、全国平均を上回る児童を前回以上にする。 「授業づくりポートフォリオ」を作成し、結果分析からつまずきを見出す。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業者が単元のゴールを意識しながら授業を行い、1学期の算数科の単元テストにおいて60点未満の児童は13.7%だった。 夏休み期間中に「授業づくりポートフォリオ」を作成し、結果分析の方法やそれをもとにつまずきの予想を立てることができた。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 学力分析の結果、思考力・判断力・表現力に課題が見られたため、教科書や単元テストの問題からつけるべき力を明確にした。図と数、式を関連付けて説明できるようにする。 つまずきの予想をもとに授業改善を行い、適切な手立てを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業者がつけるべき力を明確にして授業を行い、2学期の算数科の単元末テストにおいて60点未満の児童は12.6%だった。 標準学力テストの算数科において、全国平均を上回る児童は前回より11人増加した。 「授業づくりポートフォリオ」をもとに児童が何につまずいているのか継続して見立てを行い、改善につなげた。 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 学力分析を継続して行うとともに、家庭学習や学びタイムを活用して、学力の定着を図る。 引き続き、あらゆる角度からつまずきを予想し、課題が見られた際には授業の中で扱うことでつまずきを減らせるようにする。
							<ul style="list-style-type: none"> 年間目標読書数を設定した読書貯金に取り組み、現在目標冊数の6割以上を達成している児童は80%だった。 当該学年の教科書に紹介されている本を10冊以上読んだ児童は44%だった。 委員会でも来館者を増やす取組を行い、 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 学級でも読書活動の取組を推進するとともに、読書数が少ない児童には声をかけ、困り感に感じた対策を行い、読書に親しめるようにする。 朝読の時間や家庭学習を利用し、紹介された本を読む時間を確保する。 引き続き、委員 	<ul style="list-style-type: none"> 年間目標読書数を設定した読書貯金に取り組み、目標冊数を達成している児童は97%で、年間通して読書に親しむことができた。 当該学年の教科書に紹介されている本を全て読んだ児童は68%であるが、普段読まない本に触れることが 	3	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き学年目標を設定し、目標達成に向けて、継続的に読書に親しむことができるようにする。 高学年は、教科書に紹介されている本を選択制にするなどして、いろいろなジャンルの本に出会わせる。 引き続き、イベントを企画し

						昨年度の9月末と比較し、20人増えた。			会活動でイベントを企画し、来館者数を増やす。	できた。 ・委員会おすすめの本を紹介したり、読み聞かせを行ったりし、昨年度と比較し、来館者が100人増えた。				たり、授業で使う機会を増やしたりして、継続して図書館を利用できるようにする。
4	児童の自己肯定感と自己有用感を向上させ、自己形成力を育成する。	見直し	よりよい学校生活を送るために、自ら進んで行動する児童を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 学級、全校での活動を学級や児童会・委員会の児童が主体となって企画運営する。 	<ul style="list-style-type: none"> お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる児童80%以上。 企画運営の際には、プロセスを大切にし、児童に力がつくよう指導助言を行っている教師80%以上。 企画運営年2回以上。 	3	4	<ul style="list-style-type: none"> 児童自らが主体となって企画運営するだけでなく活動内容の質を高めるため、活動後の振り返りを大切に、今後にむけて改善策を検討する場を設ける。 ねらいを明確にもたせる、実施までのスケジュールを立てさせる、役割分担等に加えて、活動状況を把握し、必要に応じてスケジュール調整を行うなどの指導助言を行い、児童が充実感をもって活動することができるようにする。 掲示板を活用して全校で行事予定を共有し、各委員会のイベントを計画的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動の際には、互いに協力しながら課題の解決に取り組む姿が定着し、「協力して課題解決に取り組んでいる」と回答した児童は100%であった。 担当教員は、活動のねらいや見通しを明確にした指導助言を行っていると回答した教員は100%であった。 1月末までに児童会・各委員会ともイベントの企画運営を2回以上実施することができた。 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 今後は、活動後の振り返りを全体に広げ、児童自身が改善点を見だし、次の活動に生かせるようにしたり、他者評価により達成感を持たせたりする。 企画運営力はついていたが、見通しをもって計画的に取り組むことに課題がみられる。活動開始から実施までのスケジュール管理や役割分担を明確にする指導を行い、計画的に取り組む力を高めることで、活動の質の向上とさらなる自己形成力の育成を図る。 	
		★	継続	健康維持、体力向上に自ら進んで取り組む児童を	<ul style="list-style-type: none"> 自己の生活習慣と体力の課題改善に向けて、やりきり習慣では、自己の課題 	3	4	<ul style="list-style-type: none"> やりきり習慣では、ゲーム等の時間を設定させ、体力向上運動とあ 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き「生活習慣の7つの目標」を達成できるように、自己の課 	4	3	4	<ul style="list-style-type: none"> 来年度も引き続き児童と保護者が話し合っ、生活習慣における目 	

				育成する。	<p>題改善を図るための目標を設定させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 改善に向けて通信等で保護者に知らせる。 	<p>ーム等を行う時間が2時間より少ないとする児童70%以上。</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭での生活改善の取組実施70%以上。 	<p>わせて実施した。やりきり週間で目標を達成した児童は85%だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日のテレビゲーム等を行う時間が2時間より少ないとする児童79% 健康維持、体力向上の改善に向けて、学級懇談会において保護者へ本校の現状と課題の説明を行った。生活改善の取組を実施した家庭は75%だった。 				<p>題改善を図るための目標を設定させ取り組ませる。合わせて、やりきり週間だけでなく、体育の授業でも体力アップ運動を取り入れ体力向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日のテレビゲーム等を行う時間が長い実態があるため、児童と保護者へメディアとの付き合い方を考える機会を設けるとともに、家庭での生活改善の取組を確実に実施してもらうよう声をかける。 	<p>り組むことができた。また、やりきり週間や体育の授業で、体力アップ運動を行って体力向上を図ることができた。やりきり週間で目標を達成した児童85%。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日のテレビゲーム等を行う時間が2時間より少ないとする児童78%。 やりきり習慣を中心に生活改善の取り組みを実施した家庭は70%だった。また、保護者へメディアとの付き合い方を考える機会として、研修の情報提供を行った。 				<p>標を設定し、生活習慣の改善を図っていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> 1日のテレビゲーム等を行う時間が長い実態があるため、引き続き児童と保護者への啓発を行っていく。 引き続きやりきり週間や体育の授業、児童会・委員会活動と連携して体力向上を目的とした取組を行っている。
1	地域とともにある学校づくりを推進する	★	新規	<p>地域に愛着をもち、自ら関わろうとする児童を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> CSを導入し、ふるさとをテーマに課題発見解決学習を地域の方とともに進め、取り組みや学びを積極的に発信する。 学校の行事等を地域へ発信しながら、児童が地域の方とかわる場づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ふるさとが大好きな児童80%以上。 ふるさとをテーマにした学習をカリキュラムマップに位置付ける。 学校だより等の配付など、学校から地域への情報発信月1回以上。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題発見解決学習を進め、バラ園のリニューアルを行った。そして、「THEローズフェス in FUJIE」を開催し、保護者や地域の方々に学びを発信することができた。「ふるさとが大好き」と答えた児童は88.9%だった。 スポーツフェスティバルや「THEローズフェス in 	4	3	<ul style="list-style-type: none"> CSで話し合われた内容をもとにカリキュラムの見直しを行い、ふるさとをテーマにした学習をカリキュラムマップに位置付ける。 引き続き、児童が地域の方とかわる場づくりを行う。 地域の方により学校に関心を持ってもらえるよう児童の学びの姿をタイムリーに伝えるため、 	<ul style="list-style-type: none"> CSで話し合われた内容をもとに、次年度のカリキュラムについて協議し、時期や時数等の変更を行った。 スクールフェスティバルで藤江の魅力を紹介する「藤江ニスト」を児童会が企画し、交流館や地域、保護者、児童に呼びかけ、集まった写真を紹介した。また、5・6年生は自分 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> CSで話し合われた内容をもとに来年度のカリキュラムの見直しを行い、ふるさとをテーマにした学習をカリキュラムマップに位置付ける。 引き続き、児童が地域の方とかわる場づくりを行い、地域と学校のつながりを深める。 	

